

## ツォンカパ作『縁起讚』研究(1)

### 根本裕史

#### 1. 解題

ここに訳出するのはツォンカパ・ロサンタクパ (Tsong kha pa blo bzang grags pa: 1357-1419) 作 *rTen 'brel bstod pa* (『縁起讚』)、および、プルチョク・ガワンチャムパ (Phur lcog ngag dbang byams pa: 1682-1762) によるその註釈書 *'Od dkar 'phreng ba* (『白光の環』) である。翻訳を提示するに先立って、それぞれの著者と作品について概論することにしたい。

#### 1. 1. *rTen 'brel bstod pa* について

*rTen 'brel bstod pa* はツォンカパが42歳(1398年)<sup>1</sup>の時に著した、全58偈からなる韻文体の作品である。本作品の正式タイトルと書誌情報を示せば、以下の通りである。

- *Sangs rgyas bcom ldan 'das ston pa bla na med pa la zab mo rten cing 'brel bar 'byung ba gsung ba'i sgo nas bstod pa legs bshad snying po.*

Tohoku No. 5275 (15). Zhol ed. Kha. 13a-16a.

この作品はしばしばタイトルの末尾の箇所を取って“*Legs bshad snying po*” (『善説心髄』) と呼ばれる。同じ“*Legs bshad snying po*”の題名を持つ *Drang ba dang nges pa'i don rnam par phye ba'i bstan bcos legs bshad snying po* (Tohoku No. 5396. Zhol ed. Pha.) に対して、*rTen 'brel bstod pa* は“*Legs bshad snying po chung ba*” (『善説心髄・小篇』) と呼称されることもある<sup>2</sup>。

*rTen 'brel bstod pa* はその正式タイトルが示すように、「無上の師である仏世尊を、甚深なる縁起をお説きになったという観点から称賛した (*sangs rgyas bcom ldan 'das ston pa bla na med pa la zab mo rten cing 'brel bar 'byung ba gsung ba'i sgo nas bstod pa*)」讚頌である。仏陀を讚歎するという形式を取りながら、その仏陀によって説かれた「縁起」や「空」の教えについて語っているという点にこの作品の特徴がある。「縁起」と「空」はいずれも中観思想の根幹をなす重要な概念である。この両概念をテーマとする *rTen 'brel bstod pa* は、ツォンカパの中観理解のエッセンスが詰め込まれた小品であると言って良いであろう。

<sup>1</sup>*rTen 'brel bstod pa* の正確な著作年代を *Dad pa'i 'jug ngos* や *gSang ba'i rnam thar* に基づいて確定するのは困難である。ここではチャハルゲシェ・ロサンツルティム (Cha har dge bshes blo bzang tshul khriims: 1740-1810) のツォンカパ伝 *bDe legs kun gyi 'byung gnas*, V, 28v5-6 に従って、ツォンカパが42歳(1398年)の時とした (cf. Kaschewsky 1971: 137)。

<sup>2</sup>一例を挙げれば、グンタン・クンチョクテンペードンメ (Gung thang dkon mchog bstan pa'i sgron me: 1762-1823) の *Drang nges mchan 'grel*, 2b3-4 に“*Legs bshad snying po chung ba*”という呼称が見られる。

ツォンカパの伝記が伝える所によれば、彼が確信的な中観理解に至ったのは文殊菩薩から受けた啓示が基となっている<sup>3</sup>。事の発端は1390年、ツォンカパ34歳の年に遡る。この年ツォンカパはロン(Rong)のヌプチュールン寺でラマウマパ・ツォンドウセンゲ(Bla ma dbu ma pa brtson 'grus seng ge)という人物に出会う。ラマウマパは文殊菩薩の観法を習得しており、幼少の頃から文殊菩薩のヴィジョンが鮮明に見えたり、文殊菩薩の言葉を聞くことができるという特殊な才能に恵まれていた。ツォンカパはラマウマパに出会って以後、彼を通訳者にして文殊菩薩と交信をし、中観の解釈をめぐる様々な問答を交わすようになる。そして、後にはラマウマパを介さずとも文殊菩薩に直接質問ができるようになったとされている。

ツォンカパが文殊菩薩と交わしたとされる議論の詳細は、ケードゥプジェ・ゲレクペルサンポ(mKhas grub rje dge legs dpal bzang po: 1385-1438)のツォンカパ伝 *gSang ba'i rnam thar* に詳しい<sup>4</sup>。*gSang ba'i rnam thar*によれば、最初ツォンカパは「中観派の自説において認められるものは何もなく、把握されるものは何もない」というのが中観の見解であると理解していた。つまり、若き日のツォンカパは自らの主張を立てることを否定し、一切の世俗的存在を否定してしまう虚無論的な中観解釈を採用していたのである。しかし、文殊菩薩はそうした彼の中観理解を自立派と帰謬派いずれの見解でもないとして一蹴し、「顕れの側面と空の側面とに優劣をつけることは決してできない、特にあなたは顕れの側面に重きを置かなければならない」と教えた。この文殊菩薩の言葉にある「顕れの側面(snang phyogs)」とは世俗諦を意味し、「空の側面(stong phyogs)」とは勝義諦を意味する。文殊菩薩は若きツォンカパが「空の側面」を重要視するあまり、業と果報の結合関係などを損滅した断見に陥ってしまうのを回避する目的で、「顕れの側面」を軽視してはならないと論したのである。

このような文殊菩薩の教えに従ってツォンカパは考察を重ねていった。そして、ついに1397年(ツォンカパ41歳)のある晩、タクポ・ラディン(Dwags po lha sdings)の地にて、夢の中でブツダパーリタに加持されるという出来事が起こり、それを契機にツォンカパは決定的な中観理解に達したとされている<sup>5</sup>。

その地(タクポラディン)でラマ〔ウマパ〕と至尊〔文殊〕を一体のものとなして強い請願を何度もかけたことにより、ある晩、夢の中で聖者ナーガールジュナ父子達の五人(ナーガールジュナ、アールヤデーヴァ、ブツダパーリタ、バーヴィヴェーカ、チャンドラキールティ)が「自性の有無」の要点について様々な議論をなしている〔のを見た〕。その中から軌範師ブツダパーリタであるという、藍色をした体格の良いある学者が中観に関するインドの〔言葉で書かれた〕原本を手にして近づいて来て加持するという徴が現れた。その翌日〔ツォンカパが〕『中論ブツダパーリタ註』をご覧になると、労せずして帰謬派の見解の要点や否定対象の及ぶ範囲の把握などに関して、それまでとは異なった決定的な確信がお生まれになった。そして、言語的意識の

<sup>3</sup>ツォンカパが文殊菩薩から受けたとされる教えの内容と、その教えを受けてから以降の彼の中観理解との関連について福田2002が詳細に論じている。

<sup>4</sup>*gSang ba'i rnam thar*, 2b4 ff. を参照。

<sup>5</sup>*Dad pa'i 'jug ngos*, 37a6 ff. および *gSang ba'i rnam thar*, 8b5 ff. を参照 (cf. 長尾1954: 58, Thurman 1984: 84-5)。Thurman 1984: 84はツォンカパがブツダパーリタを夢に見た年を1398年とし、御牧 et al. 1996: 309はそれを1393年とするが、いずれもその根拠を明示していない。*Dad pa'i 'jug ngos* や *gSang ba'i rnam thar* からはその正確な年代を特定し難いが、ここでは *bDe legs kun gyi 'byung gnas*, V, 27v6-28v5 (cf. Kaschewsky 1971: 137) に従って、ツォンカパ41歳の年、すなわち、1397年という年代を提示した。

対象が全て消滅し、真実義を別の辺であるとする増益が残さず根絶された。<sup>6</sup>

この体験の直後に著されたのが *rTen 'brel bstod pa* なのである。上の引用文に続く箇所ではケードゥブジェは次のように記述している。

それより以後、我々のような弟子達に対しても「軌範師ブツダパーリタのこの註釈を参照しなさい」と繰り返し仰った。その理由について〔師ツォンカパは〕「同書を参照した時に〔私は中観の〕見解のポイントに関して強い確信を得た。そうした吉兆があることから〔私は自分の弟子達にも〕そのように〔語って〕いるのである」と仰っている。その後、〔師ツォンカパは〕『中論』の浩瀚な註釈をお作りになる際、テキストの難解な箇所〔について〕は大方ブツダパーリタの註釈を随時引用して解説しているのだが、その理由もその〔故事によるもの〕である。そして、〔師ツォンカパは〕師〔である釈尊の素晴らしさ〕を知った上で揺るぎない信仰を得たことに由来する『甚深なる縁起をお説きになった点から称賛した讃頌、善説心髓』をお作りになった。<sup>7</sup>

さらに、ここで *rTen 'brel bstod pa* のコロフォンにも注目したい。同書のコロフォンは次の通りである。

この〔書〕は多聞比丘ロサンタクペーペルが、チベット地方の雪山の王であるオデグンギェル神の膝元なる寂静処ラディン、別名ナムパルギェルウェーリンにて著したものである。筆記者はナムカーペルである。<sup>8</sup>

ツォンカパがブツダパーリタの夢を見たのはラディンの地であったとされるので、まさにその同じ場所で *rTen 'brel bstod pa* が著作されたことが分かる。デプン寺ゴマン学堂の第75代学堂長(1986-89年在任)を務めたケンスル・テンパギェルツェン師(mKhan zur bstan pa rgyal mtshan: b. 1932)の教示によれば、コロフォン中に見られるオデグンギェル('O de gung rgyal)とはオルカ('Ol kha)地方を支配地としてチベットに最も古くから住み着いているとされる神の名である。ツォンカパに弟子入りしたと言われるオデグンギェルは、ツォンカパが自らの代表作 *Lam rim chen mo* を著した際に「自分のことを作品の中に書いて下さい」と懇願した。すると、ツォンカパは末尾の詩頌に

<sup>6</sup>*gSang ba'i rnam thar*, 8b6-9a3: gnas der bla ma dang rje btsun tha mi dad du byas shing gsol ba drag po mang du btap pas mtshan mo zhig mnal lam du 'phags pa klu sgrub yab sras lnga rang bzhin yod med kyi gnad rnams la 'phel ba'i gtam gyis bka' bgro ba mdzad kyin 'dug pa'i nang nas / slob dpon sangs rgyas bskyangs yin zer ba'i pañdi ta sngo bsangs sku bong che ba zhig gis dbu ma'i rgya dpe zhig phyag na bzung ba tshur byon nas byin gyis brlabs pa'i mtshan ma zhig byung / de'i phyi de nyin rtsa she'i 'grel pa bu ddha pā li ta gzigs pas / 'bad pa med par thal 'gyur ba'i lta ba'i gnad dang dgag bya'i mtshams 'dzin sogs la sngar dang mi 'dra ba'i nges pa gting tshugs pa 'khrungs shing / mtshan 'dzin gyi dmigs gtad thams cad zhig / de kho na nyid kyi don la mtha' gzhan du dogs pa'i sgro 'dogs lhag ma med par drungs phyung bar gyur te /

<sup>7</sup>*gSang ba'i rnam thar*, 9a3-5: phyin chad rang re'i rjes 'jug rnams la'ang slob dpon sangs rgyas rkyangs kyi 'grel pa 'di la blta dgos zhes yang yang gsungs pa'l rgyu mtshan ni / de la bltas na lta ba'i gnad la nges pa lhag par rnyed pa'i rten 'brel zhig yod pas de ltar byas pa yin / zhes gsung ngo // de nas rtsa she'i rgya cher 'grel mdzad pa'i skabs su / gzhung dka' ba'i gnas phal che bar sangs rgyas rkyangs kyi 'grel pa re drangs pa'i bshad pa yang ched kyis mdzad pa'i rgyu mtshan yang de yin la / ston pa la shes nas mi phyed pa'i dad pa thob pa'i shugs kyis drangs pa'i bsngags pa brjod pa zab mo rten cing 'brel par 'byung ba gsungs pa'i sgo nas bstod pa legs par bshad pa'i snying po zhes bya ba mdzad do //

<sup>8</sup>*rTen 'brel bstod pa*, 16a2-3: ... 'di ni / mang du thos pa'i dge slong blo bzang grags pa'i dpal gyis gang can khrod kyi gangs ri'i dbang po 'o de gung rgyal gyi lha zhol dben gnas lha sdings ming gzhan rnam par rgyal ba'i gling zhes bya bar sbyar ba'i yi ge pa ni nam mkha' dpal lo //

「すぐれた道〔の次第〕を編纂する上での順縁をもたらし  
逆縁を除去してくれる人および精霊の一切が  
勝者によって称えられた清浄なる道から  
全世代にわたって離れることなかれ」<sup>9</sup>

という一節を付した。テンパギエルツェン師によれば、チベットの伝承ではこの「精霊 (mi min)」という語の指し示すのが他ならぬオデグンギェルであるとされているという<sup>10</sup>。

## 1. 2. 後代における *rTen 'brel bstod pa* の受容

さて、*rTen 'brel bstod pa* は小品ながらもツォンカパの中観理解のエッセンスが詰め込まれた作品であるため、現代に至るまでゲルク派では重要視されている。後に示すように、*rTen 'brel bstod pa* に対する註釈書も数多く存在する。また、現在チベットやインドで出版されているチベット語の常用経典集は *rTen 'brel bstod pa* を収録したものが多い。

ゲルク派の高僧による *rTen 'brel bstod pa* の講義や説法会も広く行われている<sup>11</sup>。近年では、例えば2006年1月にインドのアマラヴァティ (Amaravati) で開催されたカーラチャクラ・タントラ灌頂祭 (dus 'khor dbang chen) の期間中、ダライ・ラマ十四世テンジンギャンツォ (bsTan 'dzin rgya mtsho: b. 1935) によって *rTen 'brel bstod pa* に関する説法が行われ、筆者もそれを拝聴する機会を得た。さらに、2007年12月には広島龍蔵院デブン・ゴマン学堂日本別院<sup>12</sup>において、ケンスル・テンパギエルツェン師による *rTen 'brel bstod pa* の講義が行なわれたことも付け加えておきたい。本研究は同講義に基づく研究の成果である。

## 1. 3. *rTen 'brel bstod pa* の註釈書

*rTen 'brel bstod pa* には非常に多くの註釈書が存在しており、Gyaltzen and Ngawang 1982: 68-73 は46作品にのぼる註釈書の詳細なリストを与えている。その内で現在確認できる最古の註釈書は、シャンシュンパ・チューワンタクパ (Zhang zhung pa chos dbang grags pa: 1404-69) による *bsDus don snying po mchog* である。

- シャンシュンパ・チューワンタクパ (Zhang zhung pa chos dbang grags pa: 1404-69)

*Sangs rgyas bcom ldan 'das la zab mo rten cing 'brel bar 'byung ba gsungs pa'i sgo nas bstod pa legs par bshad pa'i snying po zhes bya ba'i bsdus don snying po mchog.*

Tohoku No. 5459.<sup>13</sup> 4 fols.

<sup>9</sup>*Lam rim chen mo*, 520a2: lam bzang bsgrig pa'i mthun rkyen sgrub byed cing // 'gal rkyen sel byed mi dang mi min kun // tshe rabs kun tu rgyal bas bsngags pa yi // rnam dag lam dang bral bar ma gyur cig //

<sup>10</sup>この伝承にほぼ一致すると思われる記述がトゥケン三世ロサンチューキニマ (Thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma: 1737-1802) の *Thu'u bkwan grub mtha'* (dGe lugs, 31b3-5) に見られる。トゥケンによれば、ツォンカパが *Lam rim chen mo* を著作していた頃、ニエンチェンタンラ (gNyan chen thang lha) やショクラチュクポ (Zhogs lha phyug po) といった多くの神々が遊牧民の姿を取り、ツォンカパのもとへやって来た。彼らがヨーグルトやチーズを献上して「(自分達のために) 祈願して下さい」とお願いした所、ツォンカパはこの詩頌を作ったという (cf. 立川 et al. 1995: 44)。ただし、*Thu'u bkwan grub mtha'* の該当箇所にはオデグンギェルの名が直接的には言及されていない点には注意を要する。

<sup>11</sup>筆者の知る限り、ツォンカパ自身が *rTen 'brel bstod pa* を講義したという記録は彼の伝記には見当たらない。

<sup>12</sup><http://www.mmba.jp/>

<sup>13</sup>本作品はシャンシュンパ・チューワンタクパの師であるケドゥブジェ・ゲレクペルサンポ (mKhas grub rje dge legs dpal bzang po: 1385-1438) 全集の Ka 帙に収録されている。東洋文庫 1998: viii に注記されているように、Tohoku No. 5459 (Ka. 1-260) の項目には *Zab mo stong pa nyid kyi de kho na nyid rab tu gsal ba'i bstan bcos skal bzang mig 'byed*

シャンシュンパ・チューワンタクパはツォンカパの高弟ケードゥプジェ・ゲレクペルサンポの弟子であるので、ツォンカパの孫弟子に当たる。彼が著した *bsDus don snying po mchog* は *rTen 'brel bstod pa* 本文に対して科文 (sa bcad) を与えているのみの簡略な註釈書であるため、残念ながら本文の読解に資するとは言い難いものである。

続いて、重要な *rTen 'brel bstod pa* 註釈として次の二作品が挙げられよう。

- ダライ・ラマ二世ゲンドウンギャンツォ (dGe 'dun rgya mtsho: 1476-1542)  
*sTon pa bla na med pa la zab mo rten cing 'brel bar 'byung ba'i sgo nas bstod pa legs par bshad pa'i snying po'i don bshad pa bla na med pa'i 'jug ngogs.*<sup>14</sup>  
 Tohoku No. 5568. 16 fols.
- プルチョク・ガワンチャムパ (Phur ldog ngag dbang byams pa: 1682-1762)  
*rTen 'brel bstod pa'i 'ikka 'od dkar 'phreng ba.*  
 Tohoku No. 6151. 36 fols.

ゲンドウンギャンツォの *Bla med 'jug ngogs* は、比較的簡潔ながらも *rTen 'brel bstod pa* の読解に有益な語義説明を与えるものである。同書の末尾においてゲンドウンギャンツォ自身が記している次の事柄が注目に値する。

それゆえ、まさにこの『縁起讚 (*rTen 'brel bstod pa*)』は中観の偉大な典籍の一つとされるので〔ツォンカパの見解に〕随順する学者達の註釈書も非常に多く存在するけれども、大部分は私〔ゲンドウンギャンツォ〕の眼前に行き届いていない。〔その内〕一作品のみは見ることができ、それも〔本文中に〕言葉を補足しているだけに過ぎず、典籍〔全体〕の科文分けも見受けられない。それゆえ、本書において〔私は〕自力で〔科文を〕割り当てたのであって、他の註釈作者に依拠して作ったのではない。ただし、これも典籍の科文を割り当てる仕方と、〔本文中に〕言葉を補足する仕方を僅かばかり述べたもの〔に過ぎない〕。それゆえ、他の註釈者も〔各自に〕自身の知力でもって〔どの程度まで〕詳しく科文を割り当てるかといったことを適宜に適用すべきなのであって、決して〔誰か〕一人〔の註釈者の見解〕のみに従って再説するに努める必要はないのである。<sup>15</sup>

この記述は多くの点で示唆に富んだものである。まずゲンドウンギャンツォの記述を信用して良いならば、彼の時代には *rTen 'brel bstod pa* の註釈書が「非常に多く存在」していたが、その大

のみ挙がっているが、正しくはこれは Ka. 1-235a6 にのみ相当し、Ka. 235a6-260a4 にはシャンシュンパ・チューワンタクパの *rTen 'brel bstod pa* 註 *bsDus don snying po mchog* (251b6-254b4) を含む計三つの作品が収録されている。

<sup>14</sup>現在ゲンドウンギャンツォの著作集は、その重要性にも拘らず、あまり流布しておらず入手困難である。国内では東北大学がゲンドウンギャンツォ全集を所蔵しており、利用可能である。しかし、東北大学に保存されている同全集はテキストが劣化しており、判読に苦しむ箇所が多い。

<sup>15</sup>*Bla med 'jug ngogs*, 15b1-3: de'i phyir 'di nyid dbu ma'i gzhung lugs chen po gcig tu snang bas / rjes 'brang mkhas pa dag gi nam bshad kyang ches mang bar yod 'dug na'ang phal cher bdag gi mig lam du ma bab cing gcig tsam mthong ba de yang 'bru bsnon ba tsam ma gtogs gzhung gi sa bcad ba mi snang bas 'dir ni rang stobs kyis phyee ba yin gyi nam bshad mkhan po gzhan la brten nas bgyis pa min zhing / de yang gzhung gi sa gcod tshul dang / 'bru bsnon tshul cung zad cig smras pa yin pas / nam bshad byed pa po gzhan gyis rang gi blo'i stobs kyis rgyas bsdu sa gcod tshul sogs ji ltar rigs par sbyar bar bya'i / gcig kho na'i rjes su zlos pa lhur len mi dgos so //

部分が流布していなかったということになる。そして、彼の手元には「言葉の補足 ('bru bsnon ba)」を与えているのみで科文も付せられていない簡略な註釈書が一作品のみ存在していた。シャンシュンパ・チューワンタクパの *bsDus don snying po mchog* においてはこれに反して科文が与えられているという事実、そして、*rTen 'brel bstod pa* 本文に対する言葉の補足が与えられていないという事実を考慮すれば、ゲンドウンギャンツォが言及する註釈書は *bsDus don snying po mchog* とは別の作品であると考えるのが穏当であろう。

そして次に、ゲンドウンギャンツォは「自力で (*rang stobs kyis*)」*rTen 'brel bstod pa* の科文を作成したことを明らかにしているが、このことを考慮に入れながらプルチョク・ガワンチャムパによる次の記述を見てみたい。

一切知者ゲンドウンギャンツォがお作りになった『縁起讚註 (*rTen 'brel bstod pa'i t̄ikka*)』は言葉が簡潔で意味が明瞭な優れた〔註釈〕である。しかしながら、同書と〔私ガワンチャムパが作った本註釈とで〕意味のまとめ方が一致しない〔箇所について私は〕ジェ〔ツォンカパ〕の教説を典拠にして解説した。本書は自分自身の智慧の成長だけのために作ったものであるので、語義〔の解釈〕に関して誤り〔があれば〕諸学者のお許しを頂きたい。また、少しでも良く解説した部分があれば、随喜して頂くようお願い申し上げます。<sup>16</sup>

この引用文は '*Od dkar 'phreng ba* の末尾に見られる記述である。ここから知られるようにプルチョク・ガワンチャムパはゲンドウンギャンツォの註釈を高く評価している。だが、その一方で彼は、部分的には自らの解釈がゲンドウンギャンツォの解釈と一致しないことを明らかにしている。上の記述に従えば、両者の解釈の不一致が生じているのは *rTen 'brel bstod pa* の「意味のまとめ方 (*bsdus don*)」、すなわち、科文の建て方に関してである。先に見たようにゲンドウンギャンツォは他の註釈書に頼らず自力で *rTen 'brel bstod pa* の科文を作成したことを認めた上で、後進の註釈者達に向けては「自身の知力でもって」科文の建て方について吟味するよう呼び掛けていた。まさにその呼び掛けに答える形で、プルチョク・ガワンチャムパは自身の *rTen 'brel bstod pa* 解釈を築き上げたということになる。

さて、本研究ではプルチョク・ガワンチャムパによる註釈 '*Od dkar 'phreng ba* に依拠して *rTen 'brel bstod pa* 本文を訳出し、'*Od dkar 'phreng ba* の全訳を提示する方針である。複数ある註釈書の中で '*Od dkar 'phreng ba* を採用するのは、この書が比較的詳細な解説を与えるものだからであり、なおかつ、それはゲルク派内で読まれているスタンダードな *rTen 'brel bstod pa* 註の一つだからである。なお、本研究に当たって、さらに三つの *rTen 'brel bstod pa* 註を参照し得たので、以下にそれらを示すことにしたい。

- チャンキャ二世 (三世) ロルペードルジェ (*ICang skya rol pa'i rdo rje: 1717-86*)

*rTen 'brel bstod pa'i t̄ikka legs bshad nor bu'i bang mdzod.*

MHTL No. 3812. 57 fols.

<sup>16</sup> '*Od dkar 'phreng ba*, 36a4-5: *rten 'brel bstod pa'i t̄ikka thams cad mkhyen pa dge 'dun rgya mtshos mdzad pa tshig nyung zhing don gsal ba phul du byung bar bzhugs na'ang / de dang bsdus don mi gcig pa rje yi gsung rabs kyī khungs dang bcas te bshad pa 'di ni rang gi blo gros 'phel ba kho na'i phyir byas pas tshig don nor 'khrul byung ba mkhas pa mams kyis bzod par mdzad cing legs par bshad pa cung zad mchis na rjes su yi rang bar mdzad du gsol //*

- アラクシャ・テンダルラムパ (A lag sha bstan dar lha rams pa: 1759-1840)  
*rTen 'brel bstod pa'i dka' gnas las brtsams pa'i don 'grel rin chen phreng ba.*<sup>17</sup>  
26 fols.
- グルチュ・ダルマバドラ (dNgul chu dharma bha dra: 1772-1851)  
*rTen 'brel bstod pa'i tshig don nyung ngur bkrol ba zab don lta ba'i 'dren byed.*  
Tohoku No. 6343. 13 fols.

#### 1. 4. 'Od dkar 'phreng ba とその著者

'Od dkar 'phreng ba の著者プルチョク・ガワンチャムパはセラチェ学堂 (Se ra byes) を代表する学者の一人である。この人物についてはあまり知られていないと思われるので略年譜を示すことにしよう<sup>18</sup>。

西暦 (数え年)	
1682年 (1歳)	チベット東部のチャムド (Chab mdo) にて、父アヌパク (A nu 'phags) と母タシツォ (bKra shis mtsho) の間に生まれる。幼名をデチョクスン (bDe mchog srung) という。
1694年 (13歳)	チャムド・ジヤムパリン (Chab mdo byams pa gling) のパクパラ・ギャルワギャンツォ ('Phags pa lha rgyal ba rgya mtsho: 1605-43) の下で出家。沙弥戒を受け、ガワンジヤムパの僧侶名を与えられる。
1696年 (15歳)	中央チベットへ行き、セラチェ学堂に入る。ガワンギャンツォ (Ngag dbang rgya mtsho) に師事し、ドゥラの学習を開始する。
1697年 (16歳)	二年間にわたる般若学の学習を開始する。
1698年 (17歳)	ツォクランで問答を披露し、その学識で学者達を驚かせる。秋に、後の重要な師となるドゥブカン・ゲレクギャンツォ (sGrubs khang dge legs rgya mtsho: 1641-1713) に初めて出会う。
1702年 (21歳)	セラ寺においてリンセ (gling bsre) の位を得る。
1704年 (23歳)	タシルンポ寺を訪れ、パンチェン・ラマ二世ロサンイシ (Pañ chen blo bzang ye shes: 1663-1737) の下で具足戒を受ける。その後、中央チベットに戻り、中観、律、阿毘達磨の学習に励む。
1706年 (25歳)	ラサの大祈願祭 (smon lam chen mo) で問答を行ない、カシーパ (dka' bzhi pa) の位を得る。ドゥブカン・ゲレクギャンツォに本格的に仕えて修行をするため、プルブチョク (Phur bu lcog) に移る。
1717年 (36歳)	ガンデン寺第49代座主ロサンタルギェ (bLo bzang dar rgyas) の懇願を受けて、'Jam dpal zhal lung や Lam rim bde lam に関する講義を開始する。
1720年 (39歳)	ダライ・ラマ七世ケルサンギャンツォ (sKal bzang rgya mtsho: 1708-57) の即位式に参加する。
1730年 (49歳)	パクパラの教育係に就任し、故郷チャムドに行く。
1731年 (50歳)	再び中央チベットに戻る。パンチェン・ラマ二世ロサンイシに謁見する。五百人程の僧侶達の前でラムリムの講義を行なう。
1734年 (53歳)	パンチェン・ラマ二世ロサンイシの長寿祈願の儀式を行なった後、パンチェン・ラマの要請を受けてラムリムなどを講義する。さらに、弟子達に懇願されて bLa ma mchod pa も講義する。

<sup>17</sup>白館 2006 はテンダルラムパの *rTen 'brel bstod pa* 註 *Rin chen phreng ba* などを参照してゲルク派の縁起観について論じている。

<sup>18</sup>略年譜の作成に当たってヨンジン・イシギェルツェン (Yongs 'dzin ye shes rgyal mtshan: 1713-93) の *Bla brgyud rnam thar*, 674-710 を参照した。

1757年(76歳)	チャンキャ二世(三世)ルルペードルジェ (lCang skya rol pa'i rdo rje: 1717-86) に会い、当時伝統が途絶えつつあった『大日経 ( <i>rNam snang mngon byang</i> )』の灌頂を受ける。逆に自らはチャンキャにヘーヴァジュラの九尊 ( <i>kyai rdol lha dgu</i> ) の灌頂を授ける。
1761年(80歳)	幼少のダライ・ラマ八世ジャムペルギャンツォ ('Jam dpal rgya mtsho: 1758-1804) がニェタン・デワチェン ( <i>sNye thang bde ba can</i> ) に滞在中招かれ、その教育係を引き受ける。その後、プルブチョクに戻り隠遁修行をする。
1762年(81歳)	この年に入ってもなお精力的に説法を続けていたが、8月2日に死去。

プルブチョク・ガワンチャムパは25歳(1706年)以後、プルブチョク(Phur bu lcog)山に籠もってドゥプカン・ゲレクギャンツォの下で厳しい修行に励み、特にダライ・ラマ五世ガワンロサンギャンツォ(Ngag dbang blo bzang rgya mtsho: 1617-1682)の作'*Jam dpal zhal lung*(Tohoku No. 5637)から多くを学んでいる。そして、ドゥプカン・ゲレクギャンツォ亡き後の36歳(1717年)以降は、プルブチョクにおいてほぼ毎年、春には'*Jam dpal zhal lung*を講義し、秋にはパンチェン・ラマ一世ロサンチューキギエルツェン(Blo bzang chos kyi rgyal mtshan: 1570-1662)作'*Lam rim bde lam*(Tohoku No. 5944)を講義することをライフワークとしていた<sup>19</sup>。

彼は『秘密集会タントラ』や『勝樂タントラ』など無上瑜伽タントラ関連の作品を多く著した他、サキャ派のタクツァン・ロツァーワ(sTag tshang lo tsā ba: b. 1405)によるツォンカパ批判に対する再批判の書'*sTag tshang lo tstsha ba'i brgal lan rdo rje gzegs ma*(Tohoku No. 6154)や、ゲルク派の主要な僧院の寺史を伝えた書'*Grwa sa chen po bzhi dang rgyud pa stod smad chags tshul pad dkar 'phreng ba*(Tohoku No. 6194)<sup>20</sup>でも知られる。

*rTen 'brel bstod pa*の註釈書である'*Od dkar 'phreng ba*は、全四巻よりなる著作集の第一巻(*pod dang po*)に含まれる。'*Od dkar 'phreng ba*のコロフォンに同書の著作年代は記されておらず、作成地がプルブチョクであったことのみが知られる。'*Od dkar 'phreng ba*は他の註釈書と同様、*rTen 'brel bstod pa*の科文を提示しており、その点でもまた、韻文のみから構成された本文の主意を探る上で有益である。'*Od dkar 'phreng ba*が与える科文をAppendix 2に示したので、参照されたい。

## 2. 先行研究

*rTen 'brel bstod pa*本文を扱った先行研究としてGyaltzen and Ngawang 1982とThurman 1982: 99-107, 1984: 177-184がある。この内、Gyaltzen and Ngawang 1982では*rTen 'brel bstod pa*のヒンディー語訳と英訳に加え、チベット語で書かれたこのテキストを「サンスクリット語訳」する試みがなされている。Thurman 1984<sup>21</sup>はツォンカパの'*Drang ba dang nges pa'i don rnam par phyed ba'i bstan bcos legs bshad snying po*(Tohoku No. 5396. Zhol ed. Pha.)の訳注を主体とした研究であるが、Thurman 1982: 99-107の改訂版と思われる*rTen 'brel bstod pa*の英訳を収録している。

しかし、いずれの先行研究も、後代の註釈書を活用していない点に問題があると思われる。*rTen 'brel bstod pa*は韻文体で綴られた作品であるため難解な箇所も多い。註釈書に依拠せずしては、

<sup>19</sup> *Bla brgyud rnam thar*, 692.22 ff. を参照。

<sup>20</sup> 三宅 1997: 37 を参照。

<sup>21</sup> Thurman 1984 への書評に Kuijp 1985 がある。Kuijp 1985 は Thurman 1984 の訳文や説明に関して多くの訂正案を提示しているだけでなく、有益な関連情報を詳細に与えるものである。



本作品に綴られたツォンカパの思想を十分に理解するのは困難である。また、現代に至るまでゲルク派で重要視されてきたこの作品を読解する上で、同派の伝統的な解釈を無視することは許されないであろう。そこで本研究ではこうした問題点を回避するためにプルチョク・ガワンチャムパの'*Od dkar 'phreng ba*を参照し、その全訳を提示することになっている。本研究は'*Od dkar 'phreng ba*の解釈に則って、最も妥当と思われる *rTen 'brel bstod pa* 読解を試みるものである。

### 3. *rTen 'brel bstod pa*, vv. 1-8 の概要

本稿が取り扱うのは全 58 偈からなる *rTen 'brel bstod pa* の内、vv. 1-8 までの箇所と、それに対応する '*Od dkar 'phreng ba*, 1b1-8a4 である。残りの箇所については次号以降にて順次翻訳を發表することを予定している。以下、本稿で取り扱う *rTen 'brel bstod pa*, vv. 1-8 の概要をまとめることにしたい。

#### 3. 1. *rTen 'brel bstod pa* 全体における vv. 1-8 の位置づけ

Appendix 2 に示した '*Od dkar 'phreng ba* の科文より、vv. 1-8 の註釈箇所のみ展開して和文で示せば次のようになる。

- A1 帰依文 (ad v. 1) [1b5]
- A2 論書の本体そのもの [3a3]
  - B1 縁起という観点から称賛する根拠 (ad vv. 2-4) [3a4]
  - B2 その〔縁起という〕観点からの称賛そのもの [5a4]
  - C1 略説 [5a5]
    - D1 「因縁に依存するゆえに無自性である」というお教えの素晴らしさ (ad v. 5) [5b1]
    - D2 その場合、愚者達にとっては「自性がある」という錯誤の起こる〔要因となる〕その同じ根拠(証因)が賢者にとっては「無自性である」と決定する正しい根拠(証因)となる点での素晴らしさ (ad v. 6) [6b2]
    - D3 その説示の様式が他の師にはないという点での素晴らしさ (ad vv. 7-8) [7a4]
  - C2 詳解 (ad vv. 9-51) [8a4]
  - C3 要約し、その仕方で仏陀を追想するよう他者に勧める (ad v. 52) [31b5]
- B3 讃頌作者の特性を述べる (ad v. 53) [32a6]
- A3 末尾の記述 (ad vv. 54-58) [35b3]

#### 3. 2. *rTen 'brel bstod pa* の主題

先にも触れたように *rTen 'brel bstod pa* は、縁起の教えを説いたという素晴らしさの点から仏陀を称賛した詩句である。すなわち、仏陀は数多くの特性を具えているとされるが、その中でも特に「縁起の教えを説いた」という点に焦点を当て、その観点から仏陀を讃歎したのが本作品なのである。ここでツォンカパが仏陀の説く他のいかなる教えよりも縁起を重視するのは、縁起の教えにこそ仏教の独自性があるからであり、また、仏陀が他宗教の師より優っている理由も仏陀が縁起の教えを説いている点にあると考えるからである。

#### 3. 3. 「縁起」とは何か

周知の通り、縁起という思想の起源は初期仏典にまで遡り、後代に至っても全ての仏教学派がこの教義を受け入れている。しかし、ツォンカパが *rTen 'brel bstod pa* で念頭に置いているのは、あくまでも中観派が主張する「縁起」であることに注意せねばならない。一般的なゲルク派の解

釈に従えば「縁起」には三つの意味がある。第一の意味は「それ自身の因縁に依存して発生すること」である<sup>22</sup>。この原理は全ての有為法に関して当てはまるものであり、全ての仏教学派がこの意味での「縁起」を認めている。しかし、有為法と無為法とを含めた一切の法に関して「縁起」を認めるのは中観派のみであるとされる。なぜなら、中観派は「縁起」に他の二つの意味を与えているからである。それは「それ自身の部分に依存して成立していること」および「それ自身の命名者 (rang 'dogs byed) に依存して成立していること」である<sup>23</sup>。この内、前者は中観自立派と中観帰謬派が共に認める「縁起」の意味であり、後者は中観帰謬派のみが独自に認める「縁起」である。ここでは帰謬派の縁起観に注目してみることにしよう。

帰謬派の立場において、およそ存在するもの (x) はそれ (x) として命名する概念的意識に依存してはじめて成立するものであり、そのような様式で成立していないような存在はあり得ない。例えば、「行為対象」は「行為者」との相関の下で、知によって「行為対象」と名付けられたものであり、「行為者」も「行為対象」との相関の下で「行為者」と名付けられたものである。「量るもの」と「量られるもの」、「論証するもの」と「論証されるもの」、「長」と「短」などについても同様である。こうして帰謬派の見解の下では、およそ存在するものは全てそれ自身を命名する他者に依存して成立したもの、すなわち、縁起したものである (gzhi grub na rten 'byung yin pas khyab) と見なされる。

### 3. 4. 苦しみからの解放をもたらす要因としての縁起

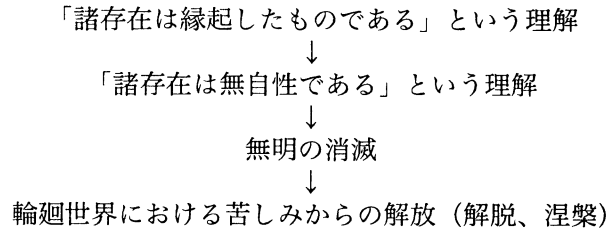
十二支縁起の理論を思い起こせば明らかなように、仏教徒にとって世間における生老病死の苦しみの根源は無明である。ツォンカパによれば、無明 (ma rig pa) とは単なる「明の欠如 (rig pa med pa)」でもなければ「明以外のもの (de las gzhan pa)」を意味するのでもない。彼にとって無明とは明の対立項目 ('gal ba mi mthun phyogs) となる認識、すなわち、非真実を捉えてしまう認識のことである<sup>24</sup>。さらに、ここで「真実」とは「無自性」または「空」のことを指しているのので、今問題にされている「無明」とは、真実には存在しない諸事物の「自性」を捉える認識のことであると考えて良い。この認識こそが、世間におけるあらゆる苦しみを生み出す原因とされるのである。

後述するように、ツォンカパは「縁起したものであること」を論拠 (sgrub byed) として「無自性であること」が論証されると考えている。そして、諸存在が無自性であるという真実を正しく理解することによって無明が断じられ、そのことによって輪廻からの解脱が可能となる。従って、ツォンカパによれば、世間における苦しみから解放されるためには無明を断じなければならず、無明を断じるためには「無自性」を理解しなければならない。さらに、「無自性」を理解するためには、まず「縁起」を理解せねばならないのである。これらのことを単純に図示すれば次のようになる。

<sup>22</sup>Lung rigs gter mdzod, 7b3: rang nyid rgyu rkyen la brten nas byung ba yin pa de / rang 'dus byas su gyur pa'i rten byung yin pa'i mtshan nyid / (『x 自身が因縁に依存して発生したものであること』が『x が有為の縁起であること』の定義である。)

<sup>23</sup>Lung rigs gter mdzod, 7b2-3: rang 'dogs byed la ltos nas grub pa rten 'byung gi mtshan nyid / yang na rang gi cha shes la ltos nas grub pa de'i mtshan nyid / (『それ自身の命名者に依存して成立していること』が『縁起』の定義である。あるいはまた、『それ自身の部分に依存して成立していること』がその定義である。)

<sup>24</sup>rTsa she tik chen, 16a6 ff. (cf. Ngawang and Garfield 2006: 26 f.) を参照。



上のような形で解脱へと至る道を最初に示した者が仏陀に他ならない。仏陀が説いた縁起の思想は、苦しみの寂滅を達成する上で必ず理解せねばならない事柄であり、まさにそれが仏教の教えの枢要であるとツォンカパは理解している。彼が「縁起を説いた者」としての側面に着目して仏陀を称賛するのは、以上のような理由からである。

### 3. 5. 縁起証因に基づく無自性論証

では、「縁起したものであること」を根拠とする無自性論証とはいかなるものであろうか。プルチョク・ガワンチャムパは次のような論証式を提示している。

(所証：) およそ、それ自身の因縁があれば存在するが、〔因縁が〕なければ存在しないこれらの諸事物—主題—は、それ自身の本性に基づいて成立した自性を欠いている。

(証因：) それ自身の因縁に依存する他律的存在であるゆえに。

この論証における証因は「縁起証因 (rten 'brel gyi rtags)」<sup>25</sup>と呼ばれるものである。先に見たように「縁起」には二つの意味があるが、上の論証で適用されている縁起証因の場合には、「それ自身の因縁に依存して発生すること」の意味での「縁起」を念頭に置いて理解すればよい。この縁起証因の主題所属性 (phyogs chos) および所証法との遍充関係 (khyab pa) を確立する論理については、'Od dkar 'phreng ba の後の箇所では詳説される ('Od dkar 'phreng ba, 8b6 ff.)。今は縁起証因に基づく無自性論証の概要とその意義を、rTen 'brel bstod pa, v. 5 に対するプルチョク・ガワンチャムパの註釈に依拠して簡潔に述べることにしたい。

プルチョク・ガワンチャムパによれば、この論証には断辺と常辺をともに退ける力がある。まず証因の主題所属性を決定することによって断辺が退けられる。例えば、輪廻世界における苦しみは業と煩惱を原因として生じるものであり、煩惱が寂滅した状態(涅槃)としての滅諦は五道、十地といった道諦を要因として達成されるものである。これらの諸結果は自律的に存立し得るものでは決してなく、必ず自身の原因に依存して成立するものである。このことが上の証因の主題所属性の具体的内容である。もし仮に苦しみが業と煩惱に依存せず、涅槃が五道、十地に依存しないとすれば、それらはどこにも存在し得ないことになり、そのため「輪廻も涅槃も存在しない」とする断辺に陥る結果となろう。だが、ひとたび上の証因の主題所属性を確定するに至ったならば、こうした誤った見解に陥ることも回避されるのである。

そして、およそ自身の因縁に依存して成立した物は、必然的に自性を欠いていると言わねばならない。そもそも何かあるものが自性を有するとは、それが自律的に成立していること (rang dbang du grub pa)、もしくは、自己の本性に基づいて成立していること (rang gi ngo bo nyid kyis grub pa)

<sup>25</sup>江島 1980: 233 ff., 240 ff., 256 (n. 69) が明らかにしているように「縁起したものであること」を根拠にして諸法が無自性であることを論証する考え方自体はインド中観文献にも多く見られ、「縁起証因」という呼称もディーバンカラシュリージュニャーナ (Dīpaṃkaraśrījñāna) の Bodhipathapradīpa に既に登場するものである。

を意味する。しかし、それ自身の因縁に依存する他律的 (gzhan dbang can) 存在が自律的に成立していることはあり得ず、それが自己の本性に基づいて成立していることもあり得ない。従って、それ自身の因縁に依存した形で他律的に存在する輪廻や涅槃は自性を欠いたものであるという結論を導くことができる。かくして、先の論証における所証が確定されるのである。この所証が確定された時、「輪廻や涅槃は自性を有する」という常辺が退けられることになるのは言うまでもない。

縁起証因を適用した無自性論証を立てれば、その論証一つの力で常辺と断辺の二辺がともに退けられる。そして、この論証を通じて二辺が断じられた時、常辺と断辺のいずれにも陥らない「中観」の見解が得られるのであるとゲルク派の学者達は考える。彼らが縁起証因に基づく無自性論証を重要視するのは、この論証が持つこうした働きのためである。

### 3. 6. 実在論者と中観派の見解の違い

しかし、先の論証を通じて「諸事物は無自性である」という理解に達することができるのは中観派のみであり、実在論の見解を未だ捨て去っていない者にそうした理解は起こり得ない。ならば、中観派と実在論者の見解の違いは何に起因するのであろうか。この問題は *rTen 'brel bstod pa* の後の箇所でも詳細に語られるが<sup>26</sup>、*rTen 'brel bstod pa*, v. 6 においても触れられている。

同偈でツォンカパが強調したいポイントとは、「それ自身の因縁に依存する他律的存在であるゆえに」という同じ証因に基づいて、実在論者と中観派は次のように相対立する結論を導き出すという事柄である。

**実在論者の見解：**「諸事物はそれ自身の因縁に依存するゆえに、有自性である」

**中観派の見解：**「諸事物はそれ自身の因縁に依存するゆえに、無自性である」

諸事物が自身の因縁によって生み出されること、換言すれば、諸事物が因果関係の上に置かれているという事実を認めるのは中観派に限ったことではない。実在論者も、例えば大麦の種から大麦の芽が生じるといった具体的事例を観察することによって、そうした事実を受け入れるであろう。ところが、ツォンカパやプルチョク・ガワンチャムパによれば、実在論者はまさにそのことを根拠にして「諸事物には自性がある」という結論を導き出してしまふ。実在論者の見解において「無自性であること」と「無であること」に意味の違いはないので、もし諸事物が無自性であるとするならば、それらが因縁に依存して生起することはあり得ないことになる。なぜなら、そもそも存在しない事物が生起するということが不合理だからである。それゆえ、自身の因縁に依拠して生起する事物には、必ず自性が具わっていなければならないと彼らは考えるのである。だが、中観派の立場から言えば、彼ら実在論者はそうした自らの確信に基づいて「辺執という束縛を堅くするばかり」である。

これに対し、中観派は全く同じ証因を根拠として「諸事物は無自性である」という正反対の結論を導き出している。*rTen 'brel bstod pa* の後の箇所でも語られるように、中観派にとって「空であること」とは「縁起すること」と同義であり、「あるもの (x) が自性を欠くこと」と「それ (x) が自身の因縁に依存して生起すること」は全く矛盾しない。それどころか、もし仮に諸事物が自性に基づいて存在するならば、それらが原因によって生み出されることはそもそもあり得ず、諸

<sup>26</sup>Cf. *rTen 'brel bstod pa*, 14a4-b1 (vv. 22-27); *'Od dkar 'phreng ba*, 15b4 ff.

事物は無自性だからこそ自身の原因の作用を受けることが可能なのであると中観派は捉えている。こうした中観派独自の見解をツォンカパは *Lam rim chen mo* において「中観派の不共の勝法 (dbu ma pa'i thun mong ma yin pa'i khyad chos)」と呼んでいる<sup>27</sup>。そして、これこそはツォンカパが文殊菩薩からの啓示を基にして理解するに至った中観思想の根幹なのである。

#### 4. 訳註

##### [凡例]

- *rTen 'brel bstod pa* のテキストはシホル版 (Zhol ed.) とタシルンポ版 (bKra shis lhun po ed.) のツォンカパ全集 Kha 帙にそれぞれ含まれているものを参照した。テキスト校訂に当たっては *'Od dkar 'phreng ba* から回収される *rTen 'brel bstod pa* のテキストも参照した。なお、vv. 1-8 の校訂テキストを Appendix 1 に示している。
- *'Od dkar 'phreng ba* のテキストは Tibetan Buddhist Resource Center (TBRC)<sup>28</sup> により CD データ化されているプルブチョク版 (Phur bu lcog ed. Vol. 1) を底本とした。
- *'Od dkar 'phreng ba* の構成に従って、*rTen 'brel bstod pa* 本文とそれぞれの偈頌に対する註釈を対応させた形で訳文を提示した。訳文の中では *rTen 'brel bstod pa* 本文をゴシック体で示し、*rTen 'brel bstod pa* 本文に対応する註釈箇所もまたゴシック体で示している。
- *'Od dkar 'phreng ba* が与える科文 (sa bcad) に基づいて見出しを作成した。
- *rTen 'brel bstod pa* は韻文体の短い言葉でまとめられた作品であるため複数の解釈が可能となる箇所もあるが、本稿では *'Od dkar 'phreng ba* の註釈に従って翻訳した。
- ツォンカパの *rTen 'brel bstod pa* は格調高い文体で綴られた詩である。しかし、翻訳に際しては、原文の持つ格調高さよりもその意味を平易な言葉で正確に伝えることを心掛けた。
- 訳文において原語を提示する際には ( ) を用い、訳文を補って文意を取り易くする際には [ ] を用いている。段落分けは任意に行なった。

##### 『縁起讚釈・白光の環』

[1b] ナモー・グルマンジュゴオーシャーヤ (師・文殊に敬礼します)。

頭れつつも空である縁起〔的存在〕を如実に正しくご覧になり、  
常と断の谷底から衆生を引き上げなさり、  
まさに師〔たる世尊〕と不可分である最高の論者  
ロサンタクの御足に敬礼する。

<sup>27</sup> *Lam rim chen mo*, 376b3 ff.

<sup>28</sup> <http://www.tbrc.org/>

その概略だけでも理解すれば  
輪廻生存の根源を引き裂くことができ、  
それ以外の教えや師よりも際立って  
信を引き出すものである縁起について僅かばかり解説しよう。

ここで法主〔ジェ・ツォンカパ〕ご自身がお作りになった讃頌、すなわち、縁起の〔真実の〕ポイントを如実に理解なさりお説きになっている点で自身の師〔である世尊〕が他〔の師〕よりも特に優れていることを理解なさった上でお作りになった讃頌『善説心髄』を解説すれば、A 1 帰依文、A 2 論書の本体そのもの、A 3 末尾の記述の三点〔より解説しよう〕。

## A 1 帰依文 [1b5]

第一。一般に [2a] 諸々の幸福の源はラマであり、また、特に〔ジェ・ツォンカパは〕縁起の〔真実の〕ポイントを如実に至尊〔文殊〕のおかげで見出していることから、〔ジェ・ツォンカパは冒頭に〕「ナモー・マンジュゴォシャーヤ（文殊に敬礼します）」と〔仰って〕至尊文殊に帰依をなさっている。

他宗教の師達は縁起のポイントを自分自身では理解していないにもかかわらず、〔それぞれの〕他宗教の師であると自ら思い込んでいる。それゆえ、〔彼らは〕あたかも盲人が盲人を導くのと同じように、自己と他者の双方を偉大な目的から外れて没落させているのである。一方、我々の師〔である世尊〕はそれとは逆に〔縁起の真実を理解して、それを正しく説いている。このこと〕をご覧になって〔ジェ・ツォンカパは〕論書の主題を要約する形で帰依を示して、

「〔縁起の実相を〕ご覧になり、お説きになったという点で  
無上の智慧者にして説法師となられたお方、  
縁起をご覧になり、〔他者のために〕教示した  
その勝利者〔たる仏世尊〕に〔私は〕敬礼する」(1)

と仰っている。〔意識に〕頭れつつも〔真実には〕空である縁起〔的存在〕の実相を [2b] 如実にご覧になったという点で無上の智慧者となり、その意味を悲をもって他者に対して直接的、間接的に如実にお説きになったという点で無上の智慧者にして説法師となられたお方、〔煩惱障と所知障の〕二障や〔五陰魔、煩惱魔、死魔、天子魔の〕四魔の軍勢に勝利した者、すなわち、「この原因に縁ってこの結果が起こる」ということと、まさにそれを根拠にして「空であるとは縁起の意味である」ということを如実にご覧になり、ご覧になった通りに他者のために教示したその方に、〔身口意の〕三門より大きな敬意を払って菩提道場に至るまでの間〔私ツォンカパは〕敬礼する。

さらに〔説明すれば〕「それをご覧になったという点で無上の智慧者となられた」と構文解釈される箇所によって「自己のための証得の円満 (rang don rtogs pa phun tshogs)」が、「それをお説きになったという点で無上の説法師となられた」と構文解釈される箇所によって「他者のための慈の円満 (gzhan don brtse ba phun tshogs)」が、「勝利者」という箇所によって「断の円満 (spangs pa phun tshogs)」という特質が〔それぞれ〕語られているのである。

さらに、〔仏世尊は〕自分自身が解脱した後他者を〔輪廻から〕解放させねばならないので、「断の円満」を〔最初に〕自身で獲得せねばならず、そのためには原因としての「智慧の円満 (mkhyen

pa phun tshogs)」を必ず獲得しなければならない。断と証得の円満を獲得した後、寂靜〔の状態〕に留まることなく有情を利するためには「慈の円満」が必要である。〔これら〕三つの円満を伴った〔状態〕を獲得した後、有情を利するためには法を説くこと以外に手段はない。〔では、仏世尊は〕法をどのように説くのかと言え、まず最初に〔意識に〕顕れるものとしての縁起〔の一側面〕(snang ba rten 'byung) を説くことで〔聞き手の心に〕業果〔の結合関係〕に関する確信を起こさせ、次に [3a]〔聞き手の〕資質に応じて、空であるという縁起〔のもう一方の側面〕(stong pa rten 'byung) に関して粗いものと微細なものを段階的に説示するのである。〔こうした順序で法を説く〕ことによって「偉業の円満 ('phrin las phun tshogs)」が〔獲得される。この「偉業の円満」が、偈中の〕「お説きになった」という箇所と「〔他者のために〕教示した」という箇所によって示されている。

〔仏世尊が〕どのように縁起〔の真実〕を如実にご覧になり、お説きになっているかということが〔本作品の〕「主題」である。本書を聴聞し、思惟することにより縁起〔の真実〕を理解することが「目的」である。既に理解した事柄を修習することにより二障という軍勢に勝利することが「究極の目的」である。さらに、これらの後続者が先行者と関係していることが「関係」である。

## A 2 論書の本体そのもの [3a3]

第二。〔論書の〕本体そのものに関して、B 1 縁起という観点から称賛する根拠、B 2 その観点からの称賛そのもの、B 3 讃頌作者の素晴らしさを述べること<sup>29</sup>、という三点〔より解説しよう〕。

### B 1 縁起という観点から称賛する根拠 [3a4]

第一。

(問：) 仏陀を称賛する仕方として、〔菩提〕心を起こしていることや資糧を積んでいること、または、その他の身口意の特質を述べるといった多種のものがある。しかし、ここで〔ジェ・ツォンカパは、仏陀が〕縁起をご覧になり、お説きになっている点のみから称賛している。これはいかなる理由によるのであろうか。

(答：) 答えよう。〔ジェ・ツォンカパは〕

「世間のある限りの  
破滅の根源は無明である。  
〔縁起を〕見るによりそれを退けた  
お方〔である世尊〕は縁起をお説きになった」(2)  
「その場合、知恵ある者が  
縁起の道を  
貴方の教えの要点であると  
どうして理解しないことがあろうか」(3)

<sup>29</sup> 「B 3 讃頌作者の素晴らしさを述べること」は *rTen 'brel bstod pa*, v. 53 に対する註釈箇所である。プルチョク・ガワンチャムパはこの偈頌の語釈を行ないつつ、讃頌作者ツォンカパの素晴らしさについて語っている ('*Od dkar 'phreng ba*, 32a6 ff.)。ツォンカパ自身が *rTen 'brel bstod pa*, v.53 で自らの素晴らしさを誇示しているという意味ではない。

「そうした場合、[3b] 一体誰が  
守護尊たる貴方を称える入り口として  
縁起をお説きになっていること以外に  
どんな素晴らしいものを得ようか」(4)

と仰っている。

この〔第二偈〕では、およそある限りの仏世尊の因果の円満は世間の破滅を除外する手段以外の何者でもないのであるが、五取蘊のことを「世間」と呼んでいる。〔チャンドラキールティの〕『四百論註』に、

「五蘊に依存して施設された我は、それぞれの生まれた場において消滅し ('jig)、壊滅する (rab tu 'jig pa) ことから『世間 ('jig rten)』〔と呼ばれるもの〕なのである」<sup>30</sup>

と説かれている通りである。また、その〔第二偈〕では、繰り返し輪廻する六趣の衆生のことも指して「世間」と言っている。

これらの世間の破滅、すなわち、生老病死などといったあらゆる一般的なないし特殊な苦しみは五取蘊を受け取ることによって発生し、五取蘊は業から発生する。業〔の内でも〕以前より存在していたものを増強するのは愛と取であり、以前にはなかった〔業を〕新たに積ませる根源は無明である。〔無明とは〕人と法を「自性によって成立したもの」として把握する俱生〔の意識〕のことである。それらの〔人と法に対する〕我執を断じる〔ために〕は、それらと把握様式が直接対立する「無我を理解する般若」〔を獲得し、その〕既に得られた理解を修習すること以外に〔4a〕方法はない。その般若によってその方は、「因縁に依存していること」を根拠に、それ自身の側から成立している法と人は微塵ほども存在しないという〔意味での〕空性ないし二辺を離れた縁起を見て、既に〔見た事柄を〕修習した。そのことにより、そのあらゆる破滅の根源を退けたのである。そして、〔空性を論証する〕理論が詳細であるか否か、修習が長期にわたっているか否か、広大な資糧によって飾られているか否かに応じて、無明およびその種子のみを退けた小乗の涅槃が得られるか、それとも、残りの習気を残さず退けた大乘の涅槃が得られるか〔という結果と〕なる。それゆえ、〔世尊は〕縁起を様々な手段によってお説きになったのである。

以上のような場合、教えの実相を理解する知恵のある者が、空性の意味は縁起の意味であると理解する道を修習することこそが、牟尼自在である貴方のある限りの全ての教えの要点であると、どうして理解しないことがあるか〔、否、〕必ずや理解するであろう。経典には

「諸々の有情は我執と我所執とによって輪廻を彷徨うのである」<sup>31</sup>

とあり、『入中論』には

「最初に『私』とあって我に執着し、〔次に〕  
『これは私のものだ』とあって事物に対して欲を起し〔4b〕

<sup>30</sup>CST 32a6-7 ad CS I I (cf. 上田 1994: 6). Cf. *sGra sbyor bam gnyis*, 188.1-3 (cf. also 石川 1993: 126): *lo kaḥ zhes bya ba lut dzya ta i tiḥ zhes bya ste / sems can lasogs pa 'chi zhing mi rtag la 'jig pa'i gzhi yin pas na 'jig rten zhes bya //* (「“loka” は “lujyata iti” と〔語義解釈される〕。有情などが死んで無常にも消滅する基盤であることから “loka” (世間) と呼ばれる。」)

<sup>31</sup>ASPP 198.31: *ahaṃkāreṇa mama kāreṇa ca sattvāḥ saṃsāre saṃsaranti / ASPP D218b5: ngar 'dzin pa dang nga yir 'dzin pas sems can rnams 'khor ba na 'khor ro /*



井戸を〔上下に〕移動する〔バケツの〕ように自由のない  
衆生に〔対して発せられた悲に敬礼する〕<sup>32</sup>

とある。また、『根本中論』には

「無明の消滅は、知によってまさにこの  
〔縁起の真実〕を修習することに依拠している」<sup>33</sup>

とあり、『四百論』には

「縁起を見るならば愚痴は起こらなくなる」<sup>34</sup>

とある。さらに、『ブツダパーリタ註』には

「『愚痴』という闇によって『知恵』という眼が覆われている愚者は、諸事物に関して  
自性を分別すると貪や瞋を起こす。しかし、『縁起の理解』という明かりによって『愚  
痴』という闇を払拭し、『般若』という眼で諸事物が無自性であることを見るならば、  
〔その起こる〕余地がない者に貪や瞋が生じることはないのである」<sup>35</sup>

とあり、『明句論』には

「諸仏は、契経をはじめとする二諦に依拠した九部教を  
世間の者達の行動に合わせて、この〔世間〕において詳しく完全に説いた。  
その内で、貪を退けるために〔説かれた〕教えが瞋を尽きさせることはなく  
瞋を退けるために〔説かれた〕教えも貪を尽きさせはしない。  
我慢などが尽きるように〔説かれた〕教えがその他の穢れを [5a] 払拭することもない。  
それゆえ、それらの〔教え〕は広範囲にわたるものではなく、それらの教えはいずれ  
も重要でない。

<sup>32</sup>MA I 3. Cf. *dGongs pa rab gsal*, 11b1-4 (cf. MABh 9.11-10.10): ngar 'dzin gyi 'jig ltaṅs nga yir 'dzin pa'i 'jig lta skyed pas / sems can rnams ni **dang por** te bdag gi bar mngon par zhen pa'i 'jig lta'i snga rol tu / ngar 'dzin pa'i 'jig ltaṅs rang bzhin gyis\* yod pa min pa'i **bdag** rang bzhin gyis yod do snyam nas / **nga zhes** pa'i don 'di nyid du ste **la** bden par mngon par **zhen** par byed do // de'i 'og tu nga yir 'dzin pa'i 'jig ltaṅs / ngar 'dzin gyi dmigs yul las gzhan pa ste de min pa'i gzugs dang mig la sogs pa'i **dnogs po la** / 'di ni **bdag gi'o zhes** bdag gi ba la bden par **chags pa bskyed pas / zo chun** gyi 'phrul 'khor 'phyan pa ste 'khor ba **ltar / rang dbang med par** 'khor ba **yi 'gro** ba la **snying rjer gyur pa gang yin pa de la 'dud** do zhes pa ni / sems can la dmigs pa'i snying rje la phyag 'tshal ba'i don no // (「我執の有身見によって我所執の有身見は生み出される。それゆえ、これらの有情は最初に、すなわち、我所に執着する有身見〔が起こる〕前に、我執の有身見によって、自性に基づいて存在するのではない我を『自性に基づいて存在する』と考えて『私』というまさにこの対象に対して真実のものとして執着する。その次に〔有情は〕我所執の有身見によって、我執の認識対象とは別の、すなわち、それではない色や眼などといった事物に対して『これは私のものだ』と行って我所を真実のものと〔見なして〕欲を起こす。それゆえ、井戸の装置が〔上下に〕移動するように、すなわち、循環するように自由なく輪廻する衆生に対して〔発せられた〕悲に敬礼する。以上は『有情に対する悲』に敬意を表するという意味である。\*) \*gyi Zhol; Read gyis)

<sup>33</sup>MMK XXVI 11cd. Cf. Pras 559.2-3 (citing MMK XXVI 11cd): **avidyāyā nirodhas tu jñānenāyaiva bhāvanāt / asyaiva praītyasamutpādasya yathāvad aviparītabhāvanāto 'vidyā** prahīyate // Cf. also *rTsa she 'ik chen*, 269a3-4: **ma rig 'gags pa** ste zad par 'gyur ba ni rten 'byung gi de nyid phyin ci ma log par **shes pas / de kho na nyid** kyi don **bsgoms pa** la brten nas de kho na nyid mngon sum du mthong bar 'gyur la de nyid mthong ba'i rnal 'byor pas ni ma rig pa nges par spong ngo // (「無明の消滅、すなわち、消尽は〔次のようにして起こる。〕縁起の真実を不顛倒に知ることによって〔瑜伽行者は〕まさにこの〔真実の〕意味を修習する。そのことに依拠して〔彼は〕真実の意味を現前のものとして見ることとなる。この時、真実を見る瑜伽行者は無明を必ずや断じるのである。)」

<sup>34</sup>CS VI 11ab (cf. 上田 1994: 94).

<sup>35</sup>BV 159a4-6 (cited in *Lam rim chen mô*, 424a1-3).

しかし、痴を尽きさせるために〔説かれた〕教えは煩惱を残さず打破する。  
〔なぜなら〕全ての煩惱は痴に依存すると勝者達は仰っている〔からである〕<sup>36</sup>

と説かれている。

あらゆる破滅の根である無明を根絶やしにする最も優れた方法とは、縁起〔の真実を世尊によって〕説かれた通りに理解することである〔。この〕ことが教えの心髄である。そうした場合、一体いかなる賢者が守護尊たる貴方を称える入り口として、縁起を如実にご覧になった上でお説きになっていること以外にどんな素晴らしいものを得ようか〔、否、〕得るはずがない。

## B 2 その観点からの称賛そのもの [5a4]

第二。称賛そのものについて、C 1 略説、C 2 詳解、C 3 要約し、その仕方で仏陀を追想するよう他者に勧める〔という三点より解説しよう〕。

### C 1 略説 [5a5]

第一。

(問：) ならば、縁起という観点から〔世尊を〕称賛する仕方は、どのようにすればよいのだろうか。

(答：)〔これに答えれば、〕D 1 「因縁に依存するゆえに無自性である」というお教えの素晴らしさ、D 2 その場合、愚者達にとっては「自性がある」という錯誤の起こる〔要因となる〕その同じ根拠(証因)が賢者にとっては「無自性である」と決定する正しい根拠(証因)となる点での素晴らしさ、D 3 その説示の様式が他の師にはないという点での素晴らしさ [5b] という三点より〔世尊に〕信頼を置き、尊敬をもって称賛し、敬礼する〔べき〕である。

### D 1 「因縁に依存するゆえに無自性である」というお教えの素晴らしさ [5b1]

第一。

「およそ縁に依存するものは  
自性を欠いているという  
このお教え以上に稀有なる  
どんな正しい教授法が存在しようか」(5)

<sup>36</sup>Pras D 198b5-199a1 (cited in *Lam rim chen mo*, 421b2-5). Cf. MŚS 1-2: yad buddhair iha śāsanam navavidham sūtrādi saṃkīrtitam lokānam caritānurodhanipuṇam satyadvayāpāśrayam / tasmin rāganirākṛtau na hi kathā doṣakṣaye jāyate dveṣasyāpi nirākṛtau na hi kathā rāgakṣaye jāyate // mānāder api yat kṣayāya vacanam nānyam malaṃ hanti tat tasmād vyāpitaram na tatra ca punas tās tā 'mahārthāḥ kathāḥ / yā mohasya parikṣayāya tu kathā kleśān aśeṣān asau hanyān mohasamāśritā hi sakalāḥ kleśā jinair bhāṣitāḥ //

ここに引用されているのは Pras 末尾に置かれた偈頌の内、最初の二偈である。L. de la Vallée Poussin による Pras のサンスクリット刊本はその一連の偈頌を欠くが、G. Tucci によって発見されたネパール写本と Pras チベット語訳には存在しており (Kragh 2006: 38-9 を参照)、それらは “*Madhyamakaśāstrastuti*” という独立の作品と見なされることもある。*Madhyamakaśāstrastuti* のサンスクリット語、チベット語のテキストは Jong 1962 に校訂されている。

と〔ジェ・ツォンカバは〕仰っている。「苦」は結果であり、業と煩惱の二者という「集」は原因である。また、「滅諦」は結果であり、「道諦」は原因である。あるいはまた、悪趣に属する器〔世間〕と有情〔世間〕の二者は不善業の結果であり、欲界の天と人の二者および〔彼らが居住する〕器〔世間〕は善業の結果であり、〔色界と無色界の〕上界に属する器〔世間〕と有情〔世間〕は不動業の結果であり、〔これらは〕雑染の側に属する因果 (kun nas nyon mongs phyogs kyi rgyu 'bras) である。そして、三乗の道と果は菩提の側に属する因果 (byang phyogs kyi rgyu 'bras) である。要約すれば、

「(所証:) おおよそ、それ自身の因縁があれば存在するが、〔因縁が〕なければ存在しないこれらの諸事物—主題—は、それ自身の本性に基づいて成立した自性を欠いている。(証因:) それ自身の因縁に依存する他律的存在であるゆえに」

という、「因縁に依存していること」を根拠にして「無自性である」と〔結論する〕このお教え以上に稀有なる、弟子に対する教誡のどんな教授法が[6a]存在しようか。なぜなら、この証因が〔適用されている〕所証〔の意味〕を知の対象となして決定することにより常辺が退けられ、主題所属性〔の意味〕を知の対象となして決定することにより断辺が退けられるのであるが、無自性を決断するその他の証因や〔所証〕法には、常辺と断辺を退けるだけのそうした力がないからである。

『龍王無熱所問経』に

「縁によって生起したものは不生であり、  
それは生起するという自性を持たない  
縁に依存するものは空なるものであると説かれている  
空性を知る者は不放逸である」<sup>37</sup>

と〔あり、これ〕をはじめとする数多くの経典には、「因縁に依存すること」を根拠にして「無自性である」ということが説かれているのである。また、〔ジェ・ツォンカバも〕『道次第大論』において

「この〔ような二諦に関する確信を得る仕方〕は、中観派の者を除いては他のいかなる者にとっても矛盾の集まり〔にしか〕見えず、矛盾はしないのだと〔彼らは〕説明することができない。それに対して、微細にして賢明であり極めて広大な考察を具えた『中観派』と呼ばれるかの賢者は、二諦を理解する手段に通じていることにより、矛盾の匂いすらも存在しないのだと決断して、勝者の究極の密意を見出している。そのことに依拠して、自身の師〔である仏世尊〕と〔その〕教えに対して甚だしく稀有なる尊敬の念を起し〔、その尊敬の念を起し〕たことによって導き出された清浄な言葉を通じて、

<sup>37</sup>Cf. Pras 239. 9-14 (cf. also Pras 491.11-14, 500.7-10, 504.1-4): yathoktam anavataptahradāpasamkramaṇasūtre / yaḥ pratyayair jāyati sa hy ajāto no tasya utpādu sabhāvato 'sti / yaḥ pratyayādhīnu sa sūnya ukto yaḥ sūnyatām jānati so 'pramattaḥ // iti // Cf. also ANP 230b2-3: rkyen las skyes pa gang yin de ma skyes // de la skye ba ngo bo nyid kyis med // rkyen la rag las gang yin stong par gsungs // stong nyid gang shes de ni bag yod pa'o //

Lam rim chen mo, 488b6-489a2 (cf. 410a6-b2): rkang pa dang po gnyis kyis rkyen las skyes pa la rang bzhin gyis ma skyes pas khyab par gsungs nas / rkang pa gsum pas rkyen la rag las pa'i rten 'brel gyi don rang bzhin gyis stong pa'i don du gsungs shing / rkang pa bzhi pas ni stong nyid de ltar rtogs pa'i phan yon bstan to // (「この『龍王無熱所問経』の偈頌の) 前半の二句は『おおよそ縁によって生起したものは全て自性に基づいて生起したものではない』ということ説いている。次に、第三句は『縁に依存すること』という縁起の意味が『自性に関して空であること』の意味であることを説いており、第四句はそのような空性理解の長所を述べている。)

智慧ある者達よ、自 [6b] 性空という場合の『空』の意味とは『縁起』の意味なのであって、『結果を生み出す能力を欠くものとしての非實在』の意味ではないのである

と高らかな声調で繰り返し宣布なさるのである」<sup>38</sup>

と仰っている。

D 2 愚者達にとっては「自性がある」という錯誤の起こる要因となるその同じ根拠が賢者にとっては「無自性である」と決定する正しい根拠となる点での素晴らしさ [6b2]

第二。

「それを把握することによって愚者達は  
辺執という束縛を堅くするばかりであるが、  
その同じ事柄が賢者にとっては、戯論の  
網を残さず断じる門となる」(6)

と [ジェ・ツォンカパは] 仰っている。内外の定説論者〔つまり、異教徒および仏教徒の定説論者〕で「事物は自性に基づいて成立している」と論じる愚者、すなわち、知識が発達していない (shed ma phye ba) 者達は、「大麦の種からは大麦の芽が生じるのであって、他の芽は生じない」などといった因果関係が各自に定まっていることを直接知覚を通じて把握することによって、「同類因からそれと類似の結果が生起するのであるから、諸事物には実相の側からこちら側に〔顕れるような仕方〕で成立した自性 (gnas tshul gyi ngos nas tshur grub pa'i rang bzhin) がまさしく存在する」と考える。そうした上で〔彼らは〕、無始爾来働いている俱生の「常辺に対する執着」を、論理を手にした上で、「自性に基づいて成立したもの」として把握する分別起〔の知識〕によって堅くするばかりである。ところが、〔そのことが〕賢者である中観派にとっては、「それ自身の因縁があれば存在するが〔因縁が〕なければ存在しない」というその同じ根拠に基づいて「〔諸事物に〕自性は存在しない」と決定し、[7a]「真実であるとする執着 (bden 'dzin)」の戯論の網を残さず断じる門、すなわち、最高の手段となるのである。

[ジェ・ツォンカパは]『道次第大論』において

「他の有情達は『因縁に依存して〔結果が〕生起する』ということ把握すると、そのことに基づいて『〔諸事物には〕それ自身の本体によって成立した自性が存在する』と把握〔し、その把握〕に束縛されることとなってしまう。しかし、賢者達はその〔同じ〕根拠に基づいて自性の存在を否定し、無自性であることへの確信を導き出し、辺執見の束縛を断じるのである。それゆえ、縁起証因による無自性の確立ということとは、稀有にして偉大な善巧方便である」<sup>39</sup>

と仰っている。

<sup>38</sup>Lam rim chen mo, 377a3-6.

<sup>39</sup>Lam rim chen mo, 488b3-5.

## D3 その説示の様式が他の師にはないという点での素晴らしさ [7a4]

第三。

「この教えは他には見られないので  
『師』という〔称号に相応しい〕のは貴方のみである。  
狼を『獅子』〔と呼称するの〕と同様に、  
異教徒〔の教祖を「師」と呼称するの〕はお世辞なのである」(7)

「嗚呼、師よ、嗚呼、帰依処よ、  
嗚呼、最高の語り手よ、嗚呼、守護尊よ、  
縁起を正しくお説きになった  
かの師に私は敬礼する」(8)

と〔ジェ・ツォンカパは〕仰っている。牟尼自在たる貴方は〔世間における〕破滅の根源を断ち切るために、〔有辺と無辺の〕二辺を同時に排除する〔縁起の〕法を教えている。この〔縁起の教え〕と一部分でも一致するようなものは、「師」と呼称される聖者カピラやアクシャパーダなどの [7b] 他者の学説には、いくら検討してみても見られないので、「師」というこの称号は守護尊たる貴方の場合にのみ有意味なものである。他〔宗派〕の教祖を「師」と呼称するのは例えば狼を「獅子」と呼称するのと同様であり、輪廻の根源 (mu la) を超越してゆく上で不適正な梯子 (yang dag pa ma yin pa'i stegs) を築くという性向を有する (chos can) 彼ら〔異教徒 (mu stegs can) <sup>40</sup>の教祖達〕は自身の弟子から「師」と呼ばれるけれども、〔それは〕お世辞、すなわち、追従に過ぎないのであって、意味のある〔言葉〕ではないのである。

以上のように、正しい理論の道より出てきた師に対する信心を起こした後、〔ジェ・ツォンカパは〕「嗚呼」という感嘆詞を四度〔述べている〕。すなわち、自分自身が正しい道へと進んでゆく歩みを完遂した後、その同じ道を他者に説示する者であるので「師」である。自分自身が全ての破滅の根源である無明など一切の過失から解放されており、他者を救済する手段に長け、さらに、〔その〕大悲は分け隔てなく全ての者に等しく〔行き渡り〕、役に立つ者であろうとなかろうと一切の〔衆生の〕ために活動なさる者であることから「帰依処」である。理論的裏付けを伴った事物の実相を如実にご覧になった上でお説きになっている〔その教え〕は、他の反論者の論駁の余地がないものであるので、「最高の語り手」である。[8a] 良い父親が可愛い子のために短所を取り除いてやり、長所を様々な飴と鞭 (zhi drag) によって伸ばしてやるように、弟子の短所を様々な飴と鞭によって取り除いてやることから「守護尊」である。以上のこの四つの語句は、世尊たる貴方のみに対する真つ当な称賛〔の言葉〕である。以上のことを根拠に、〔師ナーガールジュナが『廻諍論』において〕

<sup>40</sup>Cf. *sGra sbyor bam gnyis*, 171.10-14: *tī rthi ka ni tī rthya mbi tya te tī rthi kaḥ zhes bya ste / mtsho'i 'gram nas mtshor 'jug pa'i stegs 'cha' ba dang 'dra bar dka' thub dang mal 'byor lasogs pa chos sna tshogs spyod cing mya ngan las 'das pa'i mtshor 'jug pa'i stegs 'cha' bas na mu stegs can zhes bya //* (「tīrthika」は「tīrtham vidyate tīrthikah」と〔語義解釈される〕。海辺から海へと入ってゆく梯子 [stegs] を築くのと同じようにして、苦行や瑜伽行などといった様々な法を行じ、涅槃という海へと入ってゆく梯子を築く者であることから「mu stegs can」(異教徒) と呼ばれる。) 石川 1993: 106 f. が指摘するように、*sGra sbyor bam gnyis* は「海辺 (mtsho'i 'gram)」の比喩表現を用いていることから、「mu stegs can」の「mu」を「境界」の意味で解釈していると思われる。その場合、輪廻と涅槃の間の「境界」が、海辺と海の間「境界」に例えられていることになる。しかし、「*Od dkar 'phreng ba* は「mu stegs can」の「mu」を「mu la」、すなわち、「根 (Skt. mūla)」の意味で解釈していることが注目される。)

「空と縁起とを中道の意味で同義であるとお説きになった  
最高にして比類のない仏陀に敬礼する」<sup>41</sup>

と仰っているのと一致する形で、[ジェ・ツオンカパもまた]

「縁起を正しくお説きになった  
かの師に私は敬礼する」

と仰ったのである。

## Appendix 1 *rTen 'brel bstod pa*, vv. 1-8 チベット語テキスト

ན་མོ་གུ་རུ་མུ་ལྷོ་ལྷོ་ཡ།

གང་ཞིག་གཟིགས་ཤིང་གསུང་བ་ཡིས་<sup>42</sup> ། །  
མཁུན་དང་སྟོན་པ་སྐྱེན་མེད། །  
རྒྱལ་བ་རྟེན་ཅིང་འབྲེལ་པར་འབྱུང་། །  
གཟིགས་ཤིང་འདོམས་པ་དེ་ལ་འདུད། ། १

འཇིག་རྟེན་རྒྱད་པ་ཇི་སྟེད་པ། །  
དེ་ཡི་ཅུ་བ་མ་རིག་སྟེ། །  
གང་ཞིག་མཐོང་བས་དེ་ལྡོག་པ། །  
རྟེན་ཅིང་འབྲེལ་པར་འབྱུང་བར་གསུངས། ། २

དེ་ཚོ་སྟོ་དང་ལྷན་པ་ཡིས། །  
རྟེན་ཅིང་འབྲེལ་པར་འབྱུང་བའི་ལམ། །  
ལྷོད་ཀྱི་བསྟན་པའི་གནད་ཉིད་དུ། །  
ཇི་ལྟར་ཁོང་དུ་རྒྱུད་མི་འགྱུར། ། ३

དེ་ལྟ་ལགས་ན་མགོན་ལྷོད་ལ། །  
བསྟོད་པའི་སྟོར་ནི་སྲུ་ཞིག་གིས། །  
བརྟེན་<sup>43</sup>ནས་འབྱུང་བ་གསུང་བ་ལས། །  
ངོ་མཚར་གྱུར་པ་ཅི་ཞིག་རྟེད། ། ॣ

གང་གང་རྟེན་ལ་རྟག་ལས་པ། །  
དེ་དེ་རང་བཞིན་གྱིས་སྟོང་ཞེས། །  
གསུང་བ་འདི་ལས་ཡ་མཚན་པའི། །

<sup>41</sup> VV 85.14-5 (cf. *Lam rim chen mo*, 378b4-5): yaḥ śūnyatām pratītyasamutpādaṃ madhyamāṃ pratipadaṃ ca / ekārthāṃ nijagāda pranamāmi tam apratimabuddham //

<sup>42</sup> ཡིས་ 'Od dkar 'phreng ba; ཡི་ Zhol, bKra

<sup>43</sup> བརྟེན་ Zhol, bKra; རྟེན་ 'Od dkar 'phreng ba

ལེགས་འདོམས་རྒྱལ་ནི་ཅི་ཞིག་ཡོད། ། ལ

གང་དུ་བཟུང་བས་བྱིས་པ་རྣམས། །  
མཐར་འཇོག་འཛིང་བ་བརྟན་བྱེད་པ། །  
དེ་ཉིད་མཁས་ལ་སྟོན་པ་ཡི། །  
དྲ་བ་མ་ལུས་གཅོད་པའི་སྒྲོ། ། ཧ

བརྟན་འདི་གཞན་དུ་མ་མཐོང་བས། །  
སྟོན་པ་ཞེས་བྱ་ཞུད་ཉིད་དེ། །  
ཕ་སྐྱེས་ལ་ནི་སང་གོ་བཞིན། །  
སུ་སྟེགས་ཅན་ལའང་གཅམ་བུའི་ཚིག། ། ཉ

ཨོ་མའོ་སྟོན་པ་ཨོ་མའོ་སྐྱབས། །  
ཨོ་མའོ་སྐྱ་མཚོག་ཨོ་མའོ་མགོན། །  
རྟེན་ཅིང་འབྲེལ་འབྲུང་ལེགས་གསུང་བའི<sup>44</sup> ། །  
སྟོན་པ་དེ་ལ་བདག་ཕྱག་འཚལ། ། ཏ

Appendix 2 'Od dkar 'phreng ba 科文

A1 མཚོད་པར་བཟོད་པ། [1b5]

A2 བརྟན་བཅོས་ཀྱི་ལུས་དངོས། [3a3]

B1 རྟེན་འབྲུང་གི་སྟོན་པ་བསྟོད་པའི་རྒྱ་མཚན། [3a4]

B2 དེ་ཡི་སྟོན་པ་བསྟོད་པ་དངོས། [5a4]

C1 མདོར་བརྟན་པ། [5a5]

D1 རྒྱ་རྟེན་ལ་རག་ལས་པས་རང་བཞིན་མེད་པར་གསུངས་པའོ་མཚར་བ། [5b1]

D2 དེའི་ཚེ་མི་མཁས་པ་ལ་རང་བཞིན་ཡོད་པར་འབྲུལ་པ་སྐྱེ་བའི་རྒྱ་མཚན་དེ་ཉིད་མཁས་པ་ལ་རང་བཞིན་མེད་པར་ངེས་པ་སྐྱེ་བའི་རྒྱ་མཚན་ཡང་དག་དུ་སོང་བས་ངོ་མཚར་བ། [6b2]

D3 རྟོན་རྒྱལ་དེ་རྟོན་པ་གཞན་ལ་མེད་པས་ངོ་མཚར་བ། [7a4]

C2 རྒྱས་པར་བཤད་པ། [8a4]

D1 ཡིད་ཆེས་ཀྱི་དད་པའི་སྟོན་པ་བསྟོད་པ་རྒྱས་པར་བཤད་པ། [8a5]

E1 བརྟན་པ་སྟོན་མེད་དུ་ཡིད་ཆེས་རྟེན་རྒྱལ། [8a6]

F1 མདོར་བརྟན་དང་པོ་གཉིས་ཀྱི་དོན་རྒྱས་པར་བཤད་པ། [8b1]

G1 རྒྱ་རྟེན་ལ་རག་ལས་པའི་རྒྱ་མཚན་གྱིས་རང་བཞིན་མེད་པར་གསུངས་པའི་སྟོན་པ་བསྟོད་པ་རྒྱས་པར་བཤད་པ། [8b3]

H1 རྟོན་པའི་བཞེད་པ་མཐར་སྐྱག་གི་ལྷ་བའོས་བཟུང་བ། [8b6]

H2 དེ་ངེད་བྱེད་ཀྱི་རིགས་པ་ཡང་དག་འགོད། [11a1]

<sup>44</sup>གསུང་བའི་ Zhol, bKra; གསུངས་པའི་ 'Od dkar 'phreng ba

- H3 རིགས་པས་གྲུབ་པའི་དོན་དེའི་ལྷོག་ཕྱོགས་ལ་གནོད་པ་བསྐྱབ་པ། [12b1]
- H4 མཐུན་ཕྱོགས་ལ་བྱ་བེད་ཐམས་ཅད་འབད་པའི་གྲུབ་དོན་དེ་ལ་བཟླགས་པའི་སྐོ་ནས་སྐོན་པ་ལ་བསྐྱོད་པ། [14a6]
- G2 དེ་ཉིད་མི་མཁས་པ་ལ་མཐར་འཛིན་བརྟན་བྱེད་མཁས་པ་ལ་སྐྱོས་པའི་དྲ་བ་མ་ལུས་པ་གཙོད་པའི་སྐོར་ལྷུང་པའི་དོན་རྒྱས་པར་བཤད་པའི་སྐོ་ནས་བསྐྱོད་པ། [15b4]
- H1 བྱིས་པ་རྣམས་འཆིང་བའི་སྐོར་འགྲུར་ཚུལ། [15b6]
- H2 མཁས་པ་ལ་སྐྱོས་པ་མ་ལུས་པ་གཙོད་བྱེད་དུ་འགྲུར་ཚུལ། [17b1]
- F2 དེ་གཉིས་ལ་ངེས་པ་རྟེན་ན་མི་འཇིགས་པ་བཞི་དམ་བཅས་པ་སོགས་གསུང་རབ་ཀྱི་གནད་གཞན་ལ་ཡང་ངེས་པ་བདེ་ལག་དུ་རྟེན་ཚུལ། [19a3]
- E2 དེ་ལ་བརྟེན་ནས་སྐོན་པ་སྐྱོན་མེད་དུ་ཡིད་ཆེས་རྟེན་ཚུལ། [21b5]
- E3 ཡིད་ཆེས་རྟེན་པས་སྐོན་པའི་བསྐྱབ་པ་འཛིན་པར་སྐྱོ་བ་སྐྱེས་ཚུལ། [24b2]
- F1 སྐོང་པ་རྟེན་འབྱུང་གི་ལམ་མཚོག་དུ་རྟོགས་དཀའ་བ། [24b3]
- F2 སྐོན་པའི་མཛད་པ་ཀུན་གྱི་མཚོག་ཡིན་པས་འཛིན་སྐྱོ་བ། [25a5]
- F3 སེམས་ཅན་གྱི་དུ་གསུལ་དཀའ་བ་ཡང་འདུལ་བར་མཛད་པས་འཛིན་པར་སྐྱོ་བ། [25b5]
- F4 ལུང་གི་བསྐྱབ་པ་ཁྱད་ཆོས་གསུམ་དང་ལྡན་པས་འཛིན་པར་སྐྱོ་བ། [26a4]
- D2 བཀའ་དྲིན་རྒྱུ་དུན་གྱི་གསུལ་པའི་སྐོ་ནས་བསྐྱོད་པ་རྒྱས་པར་བཤད་པ། [26b5]
- E1 བཀའ་དྲིན་དུན་པ། [26b5]
- E2 དངོས་སུ་མ་ཐོས་པས་སྐྱོ་བ། [27a6]
- E3 གསུང་ཚུལ་དུན་ནས་སྐྱོ་བ། [27b6]
- D3 དད་གུས་དེ་གཉིས་རང་གིས་ཇི་ལྟར་བཙལ་ཅིང་རྟེན་པའི་ཚུལ། [28b4]
- E1 རྟེན་གང་གིས་བཙལ་བ། [28b5]
- E2 བརྟེན་པ་ཇི་ལྟར་བཙལ་བ། [29b1]
- E3 འགྲེལ་བྱེད་གང་གི་གཞུང་ལ་བརྟེན་ནས་རྟེན་པ། [30a2]
- C3 དོན་བསྐྱེས་ཏེ་ཚུལ་ངེས་སངས་རྒྱས་རྒྱུ་དུན་པར་གཞན་ཡང་བསྐྱེལ་བ། [31b5]
- B3 བསྐྱོད་པ་མཛད་པ་པོའི་ཁྱད་པར་བསྐྱབ་པ། [32a6]
- A3 མཇུག་གི་བྱ་བ། [33b2]
- B1 བསྐྱོ་བ། [33b2]
- B2 མཛད་བྱང་། [35b3]

### 略号および参考文献

#### (1) 一次文献

- ANP *Ārya-anavataptanāgarājaparipṛcchā-nāma-mahāyānasūtra*: Tibetan sDe dge ed. *mDo sde Pha*. Tohoku No. 156.
- ASPP *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*: P. L. Vaidya ed. *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*. Buddhist Sanskrit Texts No. 4. Darbhanga: The Mithila Institute. 1960.



- ASPP D** *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*: Tibetan sDe dge ed. *Shes phyin* Ka. Tohoku No. 12.
- dGongs pa rab gsal** Tsong kha pa blo bzang grags pa. *dBu ma la 'jug pa'i rgya cher bshad pa dgongs pa rab gsal*. Tohoku No. 5408. Zhol ed. Ma.
- CŚT** Candrakīrti. *Catuhśatakaṭikā*: Tibetan sDe dge ed. *dBu ma* Ya. Tohoku No. 3865.
- sGra sbyor bam gnyis** *sGra sbyor bam po gnyis pa*: Bod ljongs rten rdzas bshams mdzod khang ed. *dKar chag 'phang thang ma, sGra sbyor bam po gnyis pa*. Mi rigs dpe skrun khang. 2003.
- rTen 'brel bstod pa** Tsong kha pa blo bzang grags pa. *Sangs rgyas bcom ldan 'das ston pa bla na med pa la zab mo rten cing 'brel bar 'byung ba gsung ba'i sgo nas bstod pa legs bshad snying po*. Tohoku No. 5275 (15). Zhol ed. Kha.
- Thu'u bkwan grub mtha'** Thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma. *Grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad shel gyi me long*. Zhol ed. Kha.
- Dad pa'i 'jug ngogs** mKhas grub rje dge legs dpal bzang po. *rJe btsun bla ma tsong kha pa chen po'i ngo mtshar rmad du byung ba'i rnam pat thar pa dad pa'i 'jug ngogs*. Tohoku No. 5259. Zhol ed. Ka.
- Drang nges mchan 'grel** Gung thang dkon mchog bstan pa'i sgron me. *bsTan bcos legs par bshad pa'i snying po las sems tsam skor gyi mchan 'grel rtsom 'phro rnam rig gzhung brgya'i snang ba*. Zhol ed. Kha.
- bDe legs kun gyi 'byung gnas** Cha har dge bshes blo bzang tshul khirms. *rJe thams cad mkhyen pa tsong kha pa chen po'i rnam thar go sla bar brjod pa bDe legs kun gyi 'byung gnas*. R. Kaschewsky ed. *Die Leben des Lamaistischen Heiligen Tsongkhapa Blo-Bzañ-Grags-Pa (1357-1419), dargestellt und erläutert anhand seiner Vita "Quellort allen Glückes."* Wiesbaden: Otto Harrassowitz. 1971.
- bsDus don snying po mchog** Zhang zhung pa chos dbang grags pa. *Sangs rgyas bcom ldan 'das la zab mo rten cing 'brel bar 'byung ba gsungs pa'i sgo nas bstod pa legs par bshad pa'i snying po zhes bya ba'i bsDus don snying po mchog*. Tohoku No. 5459. Zhol ed. Ka.
- Nor bu'i bang mdzod** lCang skya rol pa'i rdo rje. *rTen 'brel bstod pa'i ṭikka legs bshad nor bu'i bang mdzod. lCang skya rol pa'i rdo rje'i gsung 'bum*, Kha. Beijing: Krung go bod brgyad mtho rim nang bstan slob gling nang bstan zhib 'jug khang. 1995.
- Pras** Candrakīrti. *Prasannapadā*: L. de la Vallée Poussin ed. *Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā commentaire de Candrakīrti*. Bibliotheca Buddhica IV. St. Petersburg. Reprint: Osnabrück. 1970.
- Pras D** Candrakīrti. *Prasannapadā*: Tibetan sDe dge ed. *dBu ma 'A*. Tohoku No. 3860.
- bLa brgyud rnam thar** Yongs 'dzin ye shes rgyal mtshan. *Byang chub lam gyi rim pa'i bla ma brgyud pa'i sku'i snang brnyan gsal bar byed pa'i me long*. Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang. 1990.
- Bla med 'jug ngogs** dGe 'dun rgya mtsho. *sTon pa bla na med pa la zab mo rten cing 'brel bar 'byung ba'i sgo nas bstod pa legs par bshad pa'i snying po'i don bshad pa bla na med pa'i 'jug ngogs*. Tohoku No. 5568. Zhol ed. La.
- BV** Buddapālita. *Buddapālitamūlamadhyamakavṛtti*: Tibetan sDe dge ed. *dBu ma* Tsa. Tohoku No. 3842.
- MA** Candrakīrti. *Madhyamakāvatāra*. See MABh.
- MABh** Candrakīrti. *Madhyamakāvatārabhāṣya*: L. D. L. Vallée Poussin ed. *Madhyamakāvatāra par Candrakīrti*, Traduction Tibétaine. Bibliotheca Buddhica IX. St. Petersburg. Reprint: Osnabrück. 1970.
- MMK** Nāgārjuna. *Mūlamadhyamakakārikā*: J. W. de Jong ed. *Nāgārjuna: Mūlamadhyamakakārikāḥ*. Madras: The Adyar Library and Research Centre. 1977.
- MŚS** Candrakīrti. *Madhyamakaśāstrastuti*: J. W. de Jong ed. See Jong 1962. "La Madhyamakaśāstrastuti de Candrakīrti" in *Oriens Extremus*, Vol. 9. pp. 47-56. 1962.
- rTsa she ṭik chen** Tsong kha pa blo bzang grags pa. *dBu ma rtsa ba'i tshig le'ur byas pa shes rab ces bya ba'i rnam bshad rigs pa'i rgya mtsho*. Tohoku No. 5401. Zhol ed. Ba.

- Zab don lta ba'i 'dren byed** dNgul chu dharma bha dra. *rTen 'brel bstod pa'i tshig don nyung ngur bkrol ba zab don lta ba'i 'dren byed*. Tohoku No. 6343. Collected Works (GSUN' BUM) of dNul-Chu Dharma-Bhadra, Ga. New Delhi. 1973.
- 'Od dkar 'phreng ba** Phur lcog ngag dbang byams pa. *rTen 'brel bstod pa'i t̄ikka 'od dkar 'phreng ba*. Tohoku No. 6151. Phur bu lcog ed. Vol. 1.
- Lam rim chen mo** Tsong kha pa blo bzang grags pa. *Khams gsum chos kyi rgyal po tsong kha pa chen pos mdzad pa'i byang chub lam gyi rim pa chen mo*. Tohoku No. 5392. Zhol ed. Pa.
- Lung rigs gter mdzod** 'Jam dbyangs bzhad pa ngag dbang brtson 'grus. *rTen 'brel gyi mtha' dpyod lung rigs gter mdzod blo gsal dga' ba bskyed pa'i phreng mdzes*. bKra shis 'khyil ed. Da.
- Rin chen phreng ba** A lag sha bstan dar lha rams pa. *rTen 'brel bstod pa'i dka' gnas las brtsams pa'i don 'grel rin chen phreng ba*. sKu 'bum byams pa gling ed. Da.
- VV** Nāgārjuna. *Vigrahavyāvartanī*. E. H. Johnston and A. Kunst ed. *The Vigrahavyāvartanī of Nāgārjuna with the author's commentary in Mélanges chinois et bouddhiques*, Vol. IX. 1951.
- gSang ba'i rnam thar** mKhas grub rje dge legs dpal bzang po. *rJe rin po che'i gsang ba'i rnam thar rgya mtsho lta bu las cha shas nyung ngu zhig yongs su brjod pa'i gtam rin po che'i snye ma*. Tohoku No. 5261. Zhol ed. Ka.

## (2) 二次文献

- Gyaltzen and Ngawang 1982** Gyaltzen Namdol and Ngawang Samten (trs). *Pratītyasamutpādastuti-subhāṣita-hṛdayam: Ācārya Tsōṅkhapa*. The Dalai Lama Tibeto-Indological Series-III. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies. 1994.
- Jong 1962** de Jong, J. W. "La Madhyamakaśāstrastuti de Candrakīrti" in *Oriens Extremus*, Vol. 9. pp. 47-56.
- Kaschewsky 1971** Kaschewsky, R. *Die Leben des Lamaistischen Heiligen Tsongkhapa Blo-Bzañ-Grags-Pa (1357-1419), dargestellt und erläutert anhand seiner Vita "Quellort allen Glückes."* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Kragh 2006** Kragh, U. T. *Early Buddhist Theories of Action and Result, A Study of Karmaphalasambandha, Candrakīrti's Prasannapadā, Verses 17.1-20*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 64.
- Kuijp 1985** van der Kuijp, L. W. J. "Apropos of a Recent Contribution to the History of Central Way Philosophy in Tibet: *Tsong Khapa's Speech of Gold*" in *Berliner Indologische Studien*. Band 1, pp. 47-74.
- Ngawang and Garfield 2006** rJe Tsong Khapa. Translated by Geshe Ngawang Samten and Jay L. Garfield. *Ocean of Reasoning, A Great Commentary on Nāgārjuna's Mūlamadhyamakakārikā*. Oxford University Press.
- Thurman 1982** Thurman, R. *Life & Teachings of Tsong khapa*. Dharamsala: Library of Tibetan Works & Archives.
- Thurman 1984** Thurman, R. *The Central Philosophy of Tibet, A Study of Jey Tsong Khapa's Essence of True Eloquence*. Princeton: Princeton University Press.
- 石川 1993** 石川美恵 『二巻本訳語釈—和訳と注解—』(Materials for Tibetan-Mongolian Dictionaries, Vol. 3) 東洋文庫
- 上田 1994** 上田昇 『チャンドラキールティ著『四百論注』第一～八章和訳』山喜房佛書林
- 江島 1980** 江島恵教 『中観思想の展開—Bhāvaviveka 研究—』春秋社
- 白館 2006** 白館戒雲 「縁起に関する考察—チベット撰述の資料から—」(『仏教学セミナー』84. pp. 10-32)
- 立川 et al. 1995** 立川武蔵・石濱裕美子・福田洋一 『西藏仏教宗義研究 第七巻 —トゥカン『一切宗義』ゲルク派の章—』東洋文庫
- 東洋文庫 1996** 東洋文庫チベット研究室 『西藏仏教基本文献 第一巻 *The Collected Sa-bcad of rJe yab sras gsung 'bum (1)*』東洋文庫

長尾 1954 長尾雅人『西藏佛教研究』岩波書店

福田 1999 福田洋一「ツォンカパにおける縁起と空の存在論証—中観派の不共の勝法について—」(『とんば 特集チベット II』 pp. 42-67)

福田 2002 福田洋一「ツォンカパが文殊の啓示から得た中観の理解について」(『印度学仏教学研究』 50-2. pp. 203-209)

御牧 et al. 1996 御牧克己・森山清徹・苦米地等流『大乘仏典 中国・日本編 15 ツォンカパ』中央公論社

三宅 1997 三宅伸一郎「ガンデン寺所蔵金写テンギュールについて」(『日本西藏学会会報』 41-42. pp. 33-44)

(ねもと ひろし, 広島大学大学院文学研究科博士課程後期 [インド哲学])